

新潟県・湯沢町

三国街道 三俣宿

4つの出来事

池田 誠司

2018年 脇本陣池田家、町へ寄贈



1918年 三俣大雪崩



1868年 戊辰戦争 三国峠の戦い



1848年 三俣大火



目次

一、三俣大火	1
1、あらまし	
2、囲炉裏にまつわる話	
3、囲炉裏を囲んでの食事	
二、戊辰戦争	3
1、あらまし	
2、勃発の時期と終結	
3、戦線の主な動き	
4、鳥羽・伏見の戦いと会津藩	
5、戊辰戦争（三国峠の戦い）	
6、池上武助隊長の戦略	
7、戦い	
8、浅貝宿と二居宿の焼き払い	
9、焼き払われなかった三俣宿	
三、三俣大雪崩	17
1、あらまし	
2、大災害	
3、救助	
4、大雪崩雪災碑	
5、池田家と大雪崩	

四、これからの三俣

.....

21

1、池田家の建物を湯沢町へ寄贈

2、未来に向けて（私の願い）

【脇本陣・池田家（いけだや）】

三国街道の三俣宿にあった三つの脇本陣の一つ。本陣ともう一つの脇本陣の建物は残存していない。池田家の建物は一六八〇年頃に建て替えたとされており、県文化財に指定されている。文中では「池田家」と表記。

明治五年以前の日にちは旧暦で記載した。



池田家（平成29年撮影）

一、三俣大火

1、あらまし

一八四八年（嘉永元年）当時、各家では囲炉裏の生活だった。暖を取ったり煮炊きをしたり、一家団欒の憩いの場でもあった。囲炉裏では薪を燃やした後は、墨や灰屑の熱い物もあり、それらを一旦「灰小屋」という所で保管し冷やした。

三俣大火は、三月八日の夜に出火した。その日は南風が小屋の隙間から入り火がついてしまったようである。強風で本村六十九軒のうち三十四軒、地域の半数以上を焼失するという大惨事になってしまった。池田家は風上にあったため焼失から免れた。私が小学生から中学生の頃には、まだ小さな火災が度々あった記憶がある。当時の消火作業はバケツの手渡しリレーだった。今考えると日頃からの助け合いがあり、火事になっても大勢の力によって大災害にならなかった事もあっただろうと思う。

2、囲炉裏にまつわる話「しきたり（座る位置）」

囲炉裏端にはしきたりがあり、座る位置が決まっていた。

「家長座」には家の主人、「母座（カカ座）」には家の母親、

「客座」には来客者、その他はお手伝いの人が座った。

3、囲炉裏を囲んでの食事

食事は家長・母・客の位置は変わらず、家族は長男から家長の左上より、各自の箱膳を一行に並べて座った。食事の準備がすむと、あるじが箸を持って一口食するのを見て「いただきます」と言ってから食べ始めた。当然のことで早く食事が終わっても、あるじの食事が終わるまでは正座のまま、あるじが箸を収めるのを確認して「ごちそうさま」と言って手を合わせ、食事を終わらせた。



歴史民俗資料館「雪国館」の囲炉裏コーナー

囲炉裏から離れているため手が「かじかみ（冷たくなる事）」、箸を口まで運ぶのもままならない冬もあつた。小さいながら囲炉裏の近くで食事をしたい、そんな事を考えたりもした。囲炉裏の縁を踏んではいけないことも教わつた。

二、戊辰戦争（一八六八・一八六九）約一年半

1、あらまし

徳川家康によつて一六〇三年に江戸幕府ができ、当分の間は権力争いが表面化することはなかった。それは当時、徳川幕府の強権と諸藩の結び付きがあつたからであろう。

慶応三年（一八六七年）十二月九日、新政権に徳川家も参加することを前提として大政奉還のもと王政復古の実現が図られた。しかし、薩摩長州を中心とする倒幕派勢力によつて幕府と「最後の將軍」徳川慶喜（よしのぶ）は政権から排除された。それに反発した旧幕府軍

が新政府軍に対して起こした戦いが戊辰戦争であった。これによって、明治維新の幕開けとなる。

新政府軍は、徳川家が政権を移行しただけで財力と強大な権力を保持したままでは、いつ反発があるか分らないと危惧して、一気に旧幕府勢力を倒すため、各地で潰滅させる戦いを行った。

2、勃発の時期と終結

慶応四年（一八六八年）一月三日の夕方、旧幕府軍と長州薩摩軍が鳥羽の小枝橋から城南宮付近で激突し（鳥羽・伏見の戦い）一年半に及ぶ戊辰戦争の幕開けとなった。

その後北上して函館（五稜郭）の戦いで榎本武揚が率いる榎本軍が降伏し、翌明治二年（一八六九年）五月十八日、戊辰戦争は終結した。

3、戦線の主な動き

鳥羽・伏見の戦いの後、「甲府勝沼の戦い」、「宇都宮城の戦い」が起こった。

そして、戊辰戦争の越後において最初の戦いである「三国峠の戦い」が閏（うるう）四月二十四日開戦となった。防御の準備を含み、約二週間の戦いだった。

越後中北部（川口から長岡近辺）での「北越戦争」は三国峠の戦いの後、八月まで続いた。

新政府軍（四〇〇〇人）の参謀、山縣有朋・黒田清隆軍と、米沢藩・長岡藩・会津藩等

（一三〇〇人）が戦い、長岡藩の河井継之助の指揮が軍事面で優れ、新政府軍を苦しめた。

五月十九日に新政府軍は長岡城を攻略するが、七月二十四日には長岡藩が奪取。二十九日に再度新政府軍の手に帰り、八月一日には新潟が陥落した。九月二十二日に会津藩が降伏し、旧幕臣の榎本武揚が率いて行った「函館戦争」は翌明治二年（一八六九年）五月十八日、榎本軍が降伏し、戊辰戦争は終結となった。

【まめ知識】小千谷会談

五月二日、河井（当時四十二才）は最後の望みをかけて新政府軍の岩村精一郎（当時二十四才）と会津藩の間に立って調停の役を果たし、中立で非戦争思想を訴えたが岩村から拒否され交渉は決裂した。

4、鳥羽・伏見の戦いと会津藩

慶応三年（一八六七年）十二月九日に倒幕派勢に排除させられたと同時期、長州薩摩は朝廷から「討幕（幕府を打つ意味）」の理解を得ることに成功し、翌慶応四年（一八六八年）一月三日、旧幕府軍と長州薩摩軍による鳥羽・伏見の戦いが勃発した。

「錦旗」を朝廷から受けて土佐藩も加わった新政府軍は最新式の洋式銃を使用した。旧幕府軍と主力である会津藩を含め一万五千人という圧倒的な兵力にもかかわらず、四千から五

千人の新政府軍に大敗した。

これがひいては三国峠の戦いへと移って行く。旧幕府勢力に加わっていた会津藩は新政府軍にとっては目の上のこぶで、倒す対象でもあった。また幕末激動の時期に、京都守護職として討幕派と敵対した会津藩主・松平容保（かたもり）は薩摩藩や長州藩から憎悪されており、三国峠の戦いの原因の一つにもなった。

【まとめ知識】

* 鳥羽・伏見の戦い後の段階では、池田家の先祖・岡山藩も新政府軍に参加していた。

* 旧幕府軍の最高指揮者である慶喜が、鳥羽・伏見の戦いで敗戦となった六日には大阪城を抜け出し軍艦で江戸に向かった。

② 戦う双方の体制

新政府軍… 長州・薩摩・上州八藩の兵士一五〇〇人

旧幕府軍… 会津藩・長岡藩他で集めた約三〇〇人

内訳は会津藩兵士三〇人で、隊長… 会津藩兵士・池上

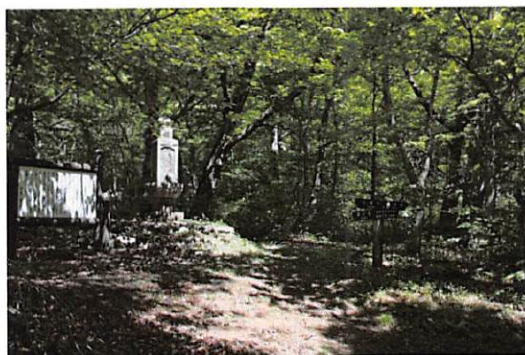
武助、副隊長… 町野久吉。町野は小出島郡奉行・源之助

の弟。陣屋で集めた郷兵七六人の他、塩沢・六日町・大

和町の庄屋を通して集められた人足。

【まめ知識】小出島陣屋

慶応四年（一八六八年）二月一日開設。新政府軍対策として、八箇峠・三国峠・清水峠を守るために長岡藩が急遽建てた陣屋で、かき集めた郷兵は侍になりたい農民等にすぎず、



大般若塚（群馬県利根郡みなかみ町永井）

にわかづくりの兵士の集まりでもあった。

③ 各宿場が旧幕府軍に提供した内容

三俣… 人足十人・馬五頭（当時三俣には十六頭いた）

二居… 終結地と軍資金

浅貝… 大工道具・作業用のつるはし・目潰し用の木炭・

木炭を入れる袋

6、池上武助隊長の戦略

閏四月一日ごろから大般若塚から三国峠にかけて防御陣地を造った。ところが沼田への到着は二十三～二十四日あたりになるといふ偵察隊の情報を得て、小出島から援軍が来る



小出島奉行所跡（新潟県魚沼市小出島）

までの間、兵士は土木・大工・運搬に当たる者等と役割を分けて準備が進められた。

池上隊長により地形を活かした戦略がたてられた。

* 壕を掘り・杭を打ち、戦いやすい場所造り

* 落とし穴・鹿砦（ろくさい）攻め込まれるのを

防ぐための尖った防御用の木）・五寸釘を打った

板など障害物の設置。

* 目潰し用の木炭灰と袋

* 敵に投げつける手頃な石



上州側から向かう大般若塚

④ 湯沢三ヶ村が旧幕府軍に提供した内容

湯沢… 人員三名、大工三名、馬一五頭、食糧米三〇俵、縄五〇束、わらじ二〇足
神立… 人員五名、大工五名、馬一〇頭、食糧米二〇俵、縄三〇束、わらじ五〇足
土樽… 人員一〇名、大工二名、馬二〇頭、食糧米三〇俵、縄五〇束、わらじ五〇足

7、戦い

新政府軍は木の陰に隠れながら、横一〇〇メートルの幅で急坂を登って戦った。会津藩兵は上から敵の接近を待つ戦法で、備え付けの石を握る者、銃に弾丸を込め準備をする者と割り当てられた。

ついに目の前に敵の姿が現れると、池上隊長の合図で戦いの火蓋が切って落とされた。不意をつかれたり障害物に妨げられたりと慌てふためく新政府軍に対して、容赦ない石投げ等

の攻撃でたちまち十数人を負傷させた。庄屋を通して集められた兵士達は一人前の戦力としての戦い振りであった。

また陣地の一角が崩れそうになった時、槍の名人である町野久吉（当時十七才）がその一団に突入し、たちまち数人を突き倒した。

これを見た兵士は士気を上げたが、新政府軍側が雇った猟師の銃で撃たれ久吉が戦死すると士気も下がり、繰り返す新政府軍の攻撃には対抗できなくなり後退を余儀なくされた。

8、浅貝宿と二居宿の焼き払い

多くの勢力に対して、にわか作りの兵士では持ちこたえられず、敗北した会津藩兵士は



久吉の墓（みなかみ町永井）

浅貝（五十四軒）二居（四十三軒）を新政府軍から利用されないようにと焼き払った。

浅貝の人々は大般若塚での敗北を知ると、向山の小屋場（浅貝川を渡って西に約一キロ、標高一四三一メートル）に身を隠した。焼失から逃れたのは本陣の蔵のみであつた。

また二居の人々は、東側にそびえる東谷山（一五五三メートル）の中腹にある「馬隠れ場」に避難した。二居の本陣（湯沢町指定文化財）は翌年に再建されたものである。その後、二居峠（小豆峠）で陣を構えてもう一戦を試みようとしたが地域の協力は得られず、池上隊長は再度の交戦を断念した。



二居本陣富沢家

9、焼き払われなかった三俣宿

池上隊長は三俣から湯沢の間にある、芝原峠で陣を構えて再度戦う計画をたてたが、今回も地域の協力を得られなかった。また新政府北陸道監府軍が先回りして、八箇峠越えで六日町に來るといふ知らせもあり、急遽、交戦の準備を止め三俣を發つと湯沢宿を通り抜け、石打から魚野川の東側を通り小出島に向かい逃げた。結果として三俣は焼かれず難を逃れた。

一説によると本陣の関新左衛門は、庄屋として三俣の生命と財産を守るのが責任であり義務であると考え、腹心である脇本陣・池田家の池田七左衛門と共に白装束に身を包み、三国街道の真ん中に正座をして二居側から会津藩兵



昭和40年頃の三俣宿（左の建物が池田家）

士が来るのを待ち構えた。漸くして来た隊長らしき馬上の武士に向かって深々と頭を下げながら「この村（三俣）を救うためにはたとえ我が身は打首・八つ裂きになろうとも心残り
は御座いませぬ。どうしても火をつけるというのであれば、まずこの首を打ち落としてから」
と切実に訴える関新左衛門の言葉に、その武士は「あいわかった」と返事をして、兵士を引
き連れ三俣を去ったと言われている。

このように越後での戊辰戦争の最初に戦われた場所として、三国峠の戦いについて忘れる事なく、記録に残し伝えて欲しいものである。

【まめ知識】

この時の新政府北陸道監府軍の参謀は黒田清隆
と山縣有朋（騎馬隊長）であった。山縣は明治・



宿札

大正の陸軍の軍人であり、三代・九代の総理大臣も務めており、脇本陣池田家に明治一四年（一八八一年）六月一〇日、参議兼陸軍中将議定官として、北陸地形巡検の時に宿泊した。

三、三俣大雪崩

1、あらまし

大正七年（一九一八年）一月九日の夜間十一時三〇分頃、「前の山（前の平）」と呼ばれている標高八四〇メートル付近から、幅二〇〇メートルにわたり表層雪崩が三俣村を襲った。当時は湯沢発電所に水を送るため、三俣から湯沢にかけて送水管の工事が行われていた。トンネル内でダイナマイト破裂直後に起きた雪崩も人災・天災の証明もできないまま、今日まで謎に包まれている災難である。

2、大災害

大雪崩により一村（三俣）をのみ込んだ雪崩による被害は、倒壊二十八軒（人家二十六軒・炊事場一軒・倉庫一軒）と倒壊土蔵四軒、半壊三軒（校舎一軒・人家二軒）だった。遭難者一八〇人のうち死を免れた人は二十二人のみで、失った人数は一五八名（村民と工事関係者）にもおよんだ。

3、救助

当日は雪に悩まされ、助かった住民だけではどうすることもできなかった。悪いことに雪崩で通信が閉ざされてしまい芝原まで雪の中を歩いて行き、電話で救助を求めた。救援に駆け付けた近郊の人は二〇〇〇人とも言われている。当時救助に来た人から聞いた話によると、芝原峠で救助に向かう人と帰る人が、山の斜面に二本の黒い線でアリが動いているように見

えたとのことである。多くの人が救助に携わってくれた事を表現している話で、有難さを痛感させられた。また雪の清津川河川では、亡くなった人の火葬が行われ、夜の空を焦がすほどの凄まじさであったという。本当に悲惨な風景であったことだろう。その風景を想像すると胸が痛む思いである。

4、大雪崩雪災碑

集まった多くの義援金は被災者に配分された後、この惨事を末永く後世に伝え霊を鎮めるため、その一部を清津川の自然石を用いて大雪崩雪災碑が建てられた。碑の裏側には犠牲者一五八人の氏名が刻まれている。



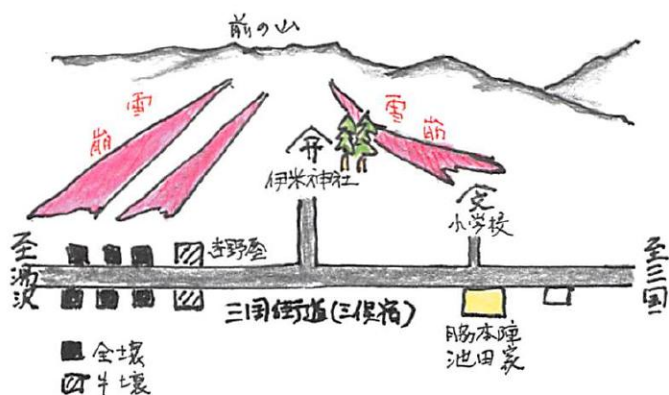
大雪崩雪災碑

5、池田家と大雪崩

大雪崩は伊米神社の大杉にぶつかって二方向に別れた。上の方に流れた雪崩は、池田家から五メートル前の尋常小学校を半壊しそこで止まった。雪崩から逃れた池田家は、江戸時代からの貴重な歴史的建造物として今日まで残っている。

【まめ知識】

三俣の住宅地は標高六五〇メートルぐらいに位置している。



四、これからの三俣

1、池田家の建物を湯沢町へ寄贈

平成三〇年（二〇一八年）四月十六日、池田家の建物（湯沢町）へ寄贈した。建物は江戸時代中期（一六八〇年）頃に建て替えたと言われる。古いだけではなく旅籠（はたご）や庄屋・問屋も兼ね地方民家の特性も色濃く残しており、三国街道では他に類のない現存建物として専門家により県が検討し、残すべき価値ある歴史建造物として昭和二十九年（一九五四年）二月一〇日、県文化財に指定された。

池田家の建造物は耐震が考えられた初期の「石場建」という建築方法で横揺れ、傾き等の



吸収対策がどこされており貴重な建物である。また当地域にはない「ヒバ材」(将棋板・碁盤等)に使用される貴重で高価な材料)が使用されている。

また上手の玄関を入った客間の天井壁間には、休宿した幕府の寛新太郎、明治の元勲・山縣有朋、新潟県議・群馬県議等の宿札が所狭しと掲げてある。文豪・森鷗外も明治十五年(一八八二年)三月二十六日(北陸地形巡検の時)宿泊している。

その先の部屋は他より一段高くなっており「上段の間」と言われ、格式ある人達の寝床とされた。書院づくりで欄間には備前岡山藩主・池田輝政を先祖とする池田家の表紋「あげはの蝶」裏紋「菊座橘」が透かし彫りで入る。



上段の間

2、未来に向けて（私の願い）

池田家は自分が生まれ育った建物であり、多くの思い出がある。寄贈するとなると正直に言えば寂しさも感じる。

三俣は多くの古い歴史が現存する地域である。せつかく残った宝として今後も長く残していつてほしい。池田家が各方面で活用され、そして三俣地区が発展すれば、その寂しさも乗り越えられると思う。今後を楽しみにしたい。



平成 29 年（2017 年）10 月 14 日に開催したクラシックギターのコンサート。「上段の間」が特別ステージとなった。